（２）　幼年会の始まり

鈴木利貞さん

①鈴木利貞（すずきとしさだ）さんの生い立ち

・１８８２年（明治１５年）、座間村河原宿（現座間市座間二丁目）に誕生。

・家は代々農業を営んでいて、多少の田畑や山林を持つ自作農であった。

・幼いころから体が弱かった。

・登下校の途中などで乱暴な子にいじめられるのがこわく、登校を渋ることもあった。

・読書が好きで、友達や学校の先生に本を借りて読んでいた。

・座間小学校の高等科を卒業後、横浜の県立第一中学（現希望ヶ丘高校）二年生の編入試験に合格し、入学。寮生活をしながら夜遅くまで勉学につとめていた。

・１８９９年（明治３２年）中学三年生のとき、病気で体調を崩し、勉強を続けるのが難しくなり退学した。

「農家になる者は、本なんか読んでないで、働きなさい」と言われてしまう時代でした。（今で言えば「マンガなんか読んでないで勉強しなさい」といったところ）利貞さんの中学への進学にはお父さんの強い反対がありました。学校の先生やお母さんに、お父さんを説得してもらってまで進学した利貞さんにとって、病気のための途中退学は大きな挫折でした。しかし、小さいころからたくさん本を読み、そこから多くのことを学んだこと。不当にいじめられ、つらい思いをしたこと。学生時代に座間を離れ、寮生活を送ることで、自分をとりまく農村社会を広い立場から見直すことができたこと・・・。これらの経験が利貞さんの、教育者としての強い理念を形作っていったものと考えられます。

ポイント

②夜のお話し会が始まる

・利貞さんが家に帰り、病気を治しながら家で読書をしたり、畑で農作業を手伝っていたりしていると、近所の子ども達が集まってくるようになった。

・集まってくる子ども達に利貞さんがいろいろな話を聞かせてやると、「おもしろい」と評判になった。

・少し大きい子ども達のために、利貞さんは夜に話を聞かせた。

・やがて行事化し、利貞さんの家で主に農閑期（秋の収穫が終わり、農家の仕事が忙しくなくなった時期）の土曜日の夜にお話し会が開催されるようになった。

・この夜のお話し会が評判となり、利貞さんの家のある河原宿地区だけでなく、座間村全域の地区から多くの子ども達が集まってくるようになった。

もともと子ども好きであった利貞さんは、子ども達に話をせがまれると、「けんかをしないで仲良くするなら」とか、「小さい子はかわいがるんだよ」などと言いながら話をしてあげました。子ども達はけんかをすると話をしてもらえないので、ついついけんかがなくなり仲良くするようになっていきました。

大人達は仕事に追われ誰も構ってくれない中、年の近い利貞さんは、子ども達にとってお兄さんのような存在でした。また、利貞さんと一緒にいれば、乱暴な子にいじめられる心配もない。友達とのけんかも公平に裁いてくれる。その上おもしろい話を聞かせてくれる。子ども達にとって利貞さんと一緒にいることは、とても居心地のよいものでした。

少し大きい子ども達は学校から帰るとすぐに、農作業や家の手伝いなどをしなければなりませんでした。幼い子ども達から利貞さんのことを聞いて、自分達もおもしろい話を聞きたい、と求める彼らのために、利貞さんは夜に仕事を終えた近所の子ども達を自宅に呼び、童話や昔話等の本を読んだり、お話をして聞かせたりするようになりました。

現代のようにテレビもゲームもマンガもない時代です。本も高価でなかなか手に入らない中、三国志の英雄の話や一寸法師の物語などに子ども達は夢中になりました。

やがて子ども達は自然とこうした集まりのことを「幼年会」と呼ぶようになりました。利貞さんの日記にも、

「(明治３４年) １月１日　幼年会員を集めておとぎばなしをしたり」

「１月６日　・・・・近所の幼年会員集まりたるゆえ、西遊記の一節を話したり。子どもらへの話の材料とて山本君より借りて来たるなり」

などと、「幼年会」という言葉が出てくるようになります。

なお、幼年会の始まりについては、後年（昭和１２年）発行される幼年会報『さざれ石』の中で利貞さんが次のように書いています。

「今の会員諸君の知っておられない昔話をして見ますと、座間に幼年会が出来たのは明治三十三年で、其の年の会員は自分で『幼年会』と名をつけて呼んだのであります。」

③幼年会が座間の各地にできる

・②「夜のお話会が始まる」で、書かれているようにして最初にできたのが「河原宿幼年会」であった。

・利貞さんは高等科の生徒達に「どうか君たちも自分の近所の者たちで、この様な会を作ってもらいたい」と呼びかけた。（明治３４年１月）

・そんな時、新田宿に発生した大火事が飛び火して、河原宿の利貞さんの家も全焼してしまった。そのため、それまで利貞さんの家で行っていた幼年会の集まりも中断した。（明治３４年２月）

・そのため、入谷、下宿、新田宿、栗原と、各地域にそれぞれ幼年会ができ、利貞さんはそこへも出かけて話をするようになった。

このころになると、利貞さんの呼びかけで、利貞さんの話を聞くだけでなく、子ども達の中にも話をする者が出てきました。また、各地域に幼年会ができたことで、それまで遠くて参加できなかった小さな子ども達も参加するようになりました。この夜のお話し会は談話会とも呼ばれました。

④幼年会の約束と理想の社会

・小さいころからいじめられがちだった利貞さんは、子ども達に、「みんなが仲良くすることが大切だ。」と言ってきかせていた。

・けんかをすると楽しみにしているおもしろい話が聞けないから・・・。初めはそんな理由だったかもしれないが、実際に仲良く過ごしているうちに子ども達は利貞さんの言う「思いやり」や「仲良く」ということの大切さを理解し始めた。

・そうして子ども達は「自分達、河原宿の子ども達だけでも弱い者をいじめることをやめよう」と考え、話し合い、柿の木の下のやぐらの上で太鼓をたたいて遊びながら、「これからは皆で仲良くして・・・」ときめた。この「柿の木の下の誓い」が後に河原宿幼年会規則の中の幼年会員が守るべき約束となっていった。

＜幼年会の約束＞（河原宿幼年会規則より）

一、意地悪き事をせざる事。

二、他人に対して悪口をいわざること。

三、喧嘩せざること。

四、学校にて教えを受けたる事は、郷党の間においても必ず守るべきこと。

五、年少者は年長者を敬うべきこと。

六、年長者は年少者を労りいつくしむべきこと。

・最初の幼年会員だった少年達は、小学校卒業後も利貞さんの開く夜学に通って勉強を続けたり、みんなでいろいろなことについて話し合ったりしていた。